

万葉集遺跡の復活

石井庄司

一、万葉集における廢墟

「古事記」や「日本書紀」には、新しく都を定め造る記事はあるがその廢墟については、なんらの記述もない。しかし、「万葉集」には、新京をほめたゝえる歌とともに、その痛ましい廢墟についてのすぐれた作がいくつもある。

年代順でいえば、持統天皇のはじめ頃と考えられる柿本人麿の近江の荒れた都を過ぐる時の作がある。(巻一ノ二九、三〇、三一)これは、近江の荒れた都のことであるが、その中に或云の語によれば「そらみつ倭をおき、青によし平山越えて」とあるので、同時に大和のすたれた都のこともあるわけである。近江荒都については、なお、高市古人の作のあることはいうまでもない。(巻一ノ三二、三三)。題詞に「感傷」とあるように、「ふるき京を見れば悲しき」とか、「荒れたる京見れば悲しも」とかの悲痛な語が用いられている。

さて、大和へもどつて、藤原宮づくりの後、志貴皇子がある。

采女の袖吹きかへす明日香風都を遠みいたづらに吹く(巻一ノ五一)

これが巻一では、藤原宮之役民作歌と藤原宮御井歌の間にはさま

れていて、まさに、新京の造営と、その讃歌の間にあつて、いつそう哀れの深いものを感じさせるのである。

明日香宮の荒れた様子を痛んだものには、鴨君足人の香具山歌がある。「……ももしきの大官人の、退り出て遊ぶ船には、梶棹もなくてさぶしも、漕ぐ人なしに」(巻三ノ二五七)とあり、反歌には「いつのまも神さびけるか」(二五九)と歎いている。或本歌は、結句「漕がむと思へど」(巻三ノ二六〇)となつている。その左注に「右今案遷都寧楽之後、怡旧作此歌歎」とある。即ち、藤原宮に新しく都城を経営されたのも束の間、また、平城京に遷都された持統天皇三年頃(七一〇年)の作ということになる。

それからよほど年月も過ぎて、天平八年(七三六年)に山部赤人は明日香の神岳に登つて「……明日香のふるき京師は、山高み川とほしろし、春の日は山し見がほし、秋の夜は川しさやけし、朝雲に鶴は乱れ、夕霧にかはづはさわく、見るとにねのみし泣かゆ、いにしへ思へば」(巻三ノ三二四)と詠んだ。反歌に「思ひすぐべきこひにあらなくに」(三二五)とあるのも、決して、普通の相聞ではなく、もつと深いものがあるといわれている。これこそ、明日香の廢墟を心から痛む悲歌である。

「万葉集」には、藤原宮から寧楽宮へと、心はずませて遷つて行

つた歌があるが（巻一ノ七九、八〇）、その寧楽宮もまた、めぐりめぐつて、ついに荒れたあとを傷む歌ができることになつた、「作者不審」とあるが、「世の中を常なきものと今ぞ知る平城の京師のうつろふ見れば」（巻六ノ一〇四五）と詠じている。

「田辺福麿集」に見える寧楽故郷を悲しむ歌には、「……さすたけの大宮人の、ふみならし通ひし道は、馬も行かず人も行かねば、荒れにけるかも」（巻六ノ一〇四七）とある。その反歌には「立ちかはり古き京となりぬれば道の芝草長く生ひにけり」（一〇四八）とあり、当時の荒れた様子が見えるようである。

次に久邇新京を讃える歌があるかと思うと、すぐあとに、三香原荒れたる墟を悲傷する作がある。同じく「田辺福麿集」にあるという作である。「三香原久邇の京は荒れにけり大宮人のうつろひぬれば」（巻六ノ一〇六〇）とあるが、まさに、そのとおり、大宮人が他に移つて行つてしまえば、それで、京師もなにもなくなつてしまふのである。

元明天皇以来、七代七十余年間の平城京も、桓武天皇の延暦三年（七八四）十一月、山城の長岡に遷都され、やがて延暦十三年（七九四）に平安京に移されてから、奈良は長い間、廢墟として残されていた。

「伊勢物語」には、「ならの京かすがの里にしるよしして、かりにいきけり。」とあり、また、「ならの京ははなれ、この京は、人の家いまだ定まらざりけるとき」と書かれている。こういう時から、やや経過してのことであろうか。「三代実録」巻第九、貞観六年（八六四）十一月七日の条に、「大和国言う」として、平城旧京、東は添上郡、西は添下郡、和銅三年に古京より遷り、平城に都して以来、この兩郡はおのずから都邑となつた。ところが、延暦七年、都を長岡に遷されてから、その後、七十七年、都城の道路は、変じて田畝と

なり、内蔵寮田百六十町、その地ひそかに開墾されたものは往々にいくつもある。そこでどうかこれを公に収めて、その租税を収めさせたいということであつたので、「許之」とある。

わずかにこれだけの記事であるが、わたしは、注目してこれを読んだ。かつて、「田辺福麿集」にあつたように、しばらくの間に、道の芝草も長く生ひ茂るのであるから、遷都以後七十七年ではよほど荒れたのであろう。そこで、住民たちは、いつの間にかはいり込んで古京を開墾して、耕作している。まず内蔵寮の田は百六十町、その他いろいろあるというのである。これを公に収めて、租税をとりたいというのであるが、道の芝草が耕されて、これは美田となつたわけである。もはやなんとも言いようのないありさま、まさに、麴香の敷を發せざるをえないしだいである。それから、奈良は永い眠りにはいるのである。

二、廢墟のよみがえり

こうした廢墟が、いつか時あつてかえりみられるようになった。

天文二十二年（一五五三）の春に、三条西公条（一一五六三、七七才で歿）という人が、連歌師の紹巴を伴つて、大和・紀伊・摂津を歩いた「吉野詣記」をものした。その年の二月二十三日の朝、京都を出発して、奈良、飛鳥、高野、吉野、当麻、法隆寺、信貴山、住吉、天王寺、水無瀬、男山八幡等の靈地を巡礼して、三月十四日に帰京した。

二月二十四日には、まず、春日神社に詣うてだが、「ひそかに詣でけり」とある。それは、天文十三年に入道したので、こういうつた。春日のあと、「高円のかたはら、羽買の山の下に、客養寺とて志深き人住みけり。様々の興を尽せること限りなし」とある。この「羽買」は、人麿作品に出てくる羽買山ではないかと、わたしは、

昭和のはじめに、雑誌「奈良文化」に書いたこともあった。なつかしい地名である。佐保姫の社、眉間寺というのがあつて、不退寺に至つて、業平自筆の影を見ている。「容顔の美麗端正なる、現の人にむかふが如し」とある。法華寺、海竜王寺、超勝寺、西大寺ときたが、「永き日は暮れやらで、菅原の伏見」にいたり、なお、招提寺、薬師寺、大安寺、元興寺と廻つて、奈良の宿所に帰つた。「この宿りたる家あるじの、由ある人にて、二階を新しくつくり、すだれ青やかにかけ渡し、むかひてみれば、伊駒山手に取るばかり向へり。」とある。

二十六日は、在原寺、柿本寺をみる。人丸塚と号すとあり、「木像の人丸おほしけり」と書かれている。布留の社に詣で、長岳寺で二夜とまつた。二十八日は、柳本から、あなし川を渡つて、檢原大御輪寺に参り、それから三輪神社に詣で、「つば市から泊瀬に参りぬ」とある。これも万葉の歌枕である。もつとも作者は「所のさま源氏物語」に書けるさながらにて「あるので、「源氏物語」の「玉鬘巻」のことなどを思いだしたのであらう。この夜、多武峯のある坊に泊つた。

二十九日は、往來の岡、橘寺など飛鳥の地に赴いた。「ふる寺の名にたち花やそのはさへ実さへ花には桜さへさく」と詠んでいるが「万葉集」の橘の歌(巻六ノ一〇〇九)を思い合せての作のようである。それが川を渡り、いはれ野に行き、萩をさがしたが「今はみちもなき野べなり」とある。「導せむ真萩やいづれいはれの謂れを問はむ古枝だになし」と詠せられたが、これも、「百濟野の萩の古枝」(巻八ノ一四三一)の赤人の歌を思ひおこしてのものと思われる。大和の靈場靈地を廻りながら、いつか万葉の歌枕めぐりともなつているのである。

三月五日には、吉野、六田の淀橋を訪ね、六日は、高田、極楽寺

八日は当麻寺。九日は片岡水明王院で、「しなてるやかたをか」と万葉集の歌(巻三ノ四一五)の「この旅人あはれ」を思いだしている。それから達磨寺、そして、法隆寺。ここでは舍利講式に聴聞隨喜し、あとで、この寺の脇坊の案内で、内陣に参り、「靈宝ども拝み奉る」とある。それから竜田に出て、「ならしの岡、神なび、竜田川、岩瀬、小倉山」などの名所を見て廻つている。翌十日には、信貴山を越えて、八尾から天王寺に赴いた。

平安遷都以来、七百六十五年で、奈良の廢墟がようやく、歌枕として、よみがえつてきたのである。しかし、世は戦国時代の草茫のときで、ように復活したわけではない。

慶長、元和と世は治つて、やつと学問の道が開け、万葉の学問がおこつてきた。下河辺長流は、大和竜田の人ということで、水戸光圀の命を受けて、「万葉集」の注釈をはじめたが成らず、僧契沖は師に代つて、「万葉集代匠記」を二回にわたつて成就した。初稿本は、貞享三年(一六八六)にでき、精撰本は、元禄三年(一六九〇)にできた。その精撰本のはじめにある総釈の「集中地名」の項を見ていくに、奈良の地名については、かなりの程度まで説明されている。「契沖全集」第八卷の雑著の部に「大和国地名類字」(書名は全集編者のつけたもの)一卷がある。大和の地名をいろはに分類して、考証を付記したもので、かなりよく調べてある。なお、文献の上の調査が多いようであるが、そのうちには、実際に踏査にかゝるものもあるようである。たとえば「十市郡耳梨山。俗に天神山といふ。北八木村の東に有。又耳高山とも、青菅山ともいふ。藤原三井の歌に見えたり。耳無川、麓にながれ、耳無池、かすかにのこれり。耳無川、山の東のふもとにながれて、北に行。のうち、藤原御井歌に見える「青菅山」などをあげるが、他は、かなり具象的である。こうして、大和の国が廢墟の中から人々の心へ呼びかけて来る

ことになる。

三、奈良の復活

元禄七年（一六九四）九月九日の重陽を奈良で迎えた芭蕉は、左のような作をなしていること、九月十日付の杉風あての書簡で知ることができ。

菊の香や奈良には古き仏たち

菊の香や奈良はいくよの男ぶり

びいと啼く尻声かなし夜の鹿

「奈良には古き仏たち」の作は、支考の「笈日記」にしるされ、「芭蕉翁行状記」にもあり、多く人口にかいしやしている。「いくよの男ぶり」は、「泊船集」にでていたが、どちらかと言えば、「仏たち」の作ほど人に知られていないようである。

杉風あての書簡は、九月十日に認めていて、制作してまのないとき、それで「いまだ句躰難定候。他見被成まじく候。」とあつて、いわば未定稿、そのうち一方が支考の「笈日記」によつて權威づけられたのであろう。けれども、「いくよの男ぶり」の作は、なかなか意味のある作で、見のがしえないところと思うのである。

「男ぶり」については、旧注は多く、伊勢物語によつてゐる。しかし「伊勢物語」の主人公としてのやさ男だけでなく、もう一つ芭蕉には、「白銀の目ぬきの大刀をさげ佩きて奈良の大路を練るは誰が子ぞ」のもつと古い、すなわち、平城京の時代の男の子たちをあたまに描いていたのではないか。「古き仏たち」の靈地靈場としてのほかに、もう一つ万葉の故里としての奈良があつたのではないかと思ふのである。

天文二十二年の三条西公条の「吉野詣記」が靈場の巡礼をしつづけんと万葉の歌枕をたずねる旅となつたと同じではないかと思ふ

れるのである。

芭蕉のこの精神は、次の賀茂真淵によつてかなりよく達せられたのではないかと思ふ。宝曆十三年（一七六三）、六十七歳の真淵は、田安宗武の命をうけて、門人、村田春郷、春海の兄弟たちを伴つて大和を訪ねた。薬師寺においては、仏足石の歌の拓本をとつてもち帰つた。かの吉野の花を見ては、「唐土の人に見せばやみ吉野の吉野の山の山ざくら花」と詠んだことなど、人のよく知るところである。ことに、その帰途、五月二十五日、伊勢松坂で本居宣長にめぐり会つたことは、もつともよく知られているところである。「万葉集」その他古代の学にいそしんできた真淵の晩年における大きな仕事であつた。

ところが、小山正博士著「賀茂真淵伝」によると、真淵は、享保八年（一七二三）、二十七歳のとき、すでに一回、大和にも足を運んでいて、その紀行が残つているということである。「神風の伊勢のおほかみ、青丹よしならの春日のみやしろををろがみ奉らばやとて、おほけなくも弥生のはじめつかた旅だち侍る。」とあり、「三山の霞のたつを見て、此山はむかしあらそひしなごいひけるが、今は霞のへだてもなく立てわたるに」として、

香具山のかすみうららにうねび山みみなし山に立つつづきけりとある。それから「飛鳥の御神にまうでて、里人のおほ宮の跡、古へより名高かう聞ゆる所々を尋ぬるに、ここよといふも有り、かしこよといふも有りて、さだかならず。飛鳥の井などいふも、いささかふりたるさまにもあらで、今名付けつるものなどの様におもはるも」として、

さだかなる道にもさそへ飛鳥風旅行くそでをいたづらに吹く」と作がある。真淵の家集には、いつの頃ともはつきりしないが「家に歌よみけるに春日望山といふ事を」として

見わたせば天の香具山うねび山あらそひたてる春霞かな

という作がある。これは例の三山の歌の解にあつた一つの解釈となるものである。それに類するものが、ここにもあるわけである。

若き真淵の大和紀行がたしかなものとなれば、四十年のむかしに、すでに、真淵の心には、奈良がよみがえつていたわけで、たいへん意味の深いこととなる。

明和九年（一七七二）三月五日に伊勢の松坂を出発して、吉野の花を見、かえりに飛鳥地方をめぐつた本居宣長の「菅笠日記」ははつきりと万葉および古代の遺跡を親しく訪ねて、そこからなんらかのものを得ようとする意欲があるようである。一草一木も、ここにあるものは、すべて、「いにしへの心」のあらわれとなるのである。香具山に登つての一節など、まことに感銘の深いものがある。

「……しばしやすみて、かれないひなどくひつつ、よもの山々里々をうち見やりたるけしき。いはんかたなくおもしろきに、『のぼりたち国見をすれば、国原は』など、声おかしくて、わかき人々のうちずしたる。さしあたりでは、ましていにしへのばしく、見ぬ世のおもかけさへ立ちそふこちして

ももしきの大官人のあそびけむかぐ山見ればいにしへのおもほゆ
ここで「万葉集」にある明日香故京を痛む作と比較してみると、大いにその趣きを異にしていることを知るのである。ここには、別に復活の精神がただよっているのである。

ヴァインケルマンがイタリアで客死したのは、一七六八年で、ちょうど真淵の没前一年のことである。宣長の「菅笠日記」は、明和九年（一七七二）で、ヴァインケルマンの客死後四年というわけで、かのブルックハルトのいうローマが古代の遺跡としてよみがえつてきたときとは同期を一にしているようである。

四、潜在する可能性の発見

「藤なみの花をし見れば奈良のみかど京のみかどの昔こひしも」と正岡子規が病中で詠みあげたのは、明治三十四年（一九〇一）の初夏の頃であつた。枕もとにおかれた藤の花からこうした想像を逞しうしたのは、それより六年前の明治二十八年（一八九五）の秋の頃ではあつたが、奈良や法隆寺に行つた体験が裏付けされているものと思われる。

明治三十六年（一九〇三）の七月から八月にかけて、長塚節は、京都、奈良と各地を歩き、いくつかの佳作を残している。作者ときに二十五歳であるが、この年は、創刊の「馬酔木」誌上に「万葉巻の十四」を書いた作者である。

見れど飽かぬ嫩草山に夕霧のほのほのにはふくさ萩の花
ゆふ月の光り乏しみ樹のくれの倉梯山にふくろふのなく

檜原の神の宮居の齋庭には葦ぞおひたる御井の真清水
などの諸作、いづれも、万葉を希求する人の作として、この大和の地にあることを格別に心にとめているようである。大和の廢墟にたつことが、同時に万葉への復活となるといつた具合である。

伊藤左千夫も、明治三十六年十一月、蕨真と共に、東海道から京都、奈良へと旅し、この年「万葉論」などを書いている。しかし、奈良での作は残っていない。安江秋水が、明治三十七年二月「馬酔木」第八号によせた「古墨瓦硯」の前書によると「寧楽の紅葉見に遊ばれし左千夫兄より、歌たよりありける時、ともしきに吾もよみし歌の中」として、「しぐれ降る寧楽山紅葉うるはしみ見に来し人は去りがてにせり」「寧楽の山もみづる秋のともしきに見ず久にしていただにこふらく」などの作がある。その感動は見るべきものが少くない。

佐佐木信綱博士は、明治三十一年（一八九八）四月、奈良・吉野に遊んだとのことであるが、詠草はよくわからない。明治四十一年（一九〇八）の「伊勢大和路」によると、いろいろの古文獻の採訪とともに、大和では、藤原宮や輕の道のほとりを歩き、平城京の址をたずね、万葉集の意義などを説いてある。歌集「新月」（大正元年）には、有名な「ゆく秋の大和の国の葉師寺の塔の上なる一ひらの雲」があり、「藤原の大宮ごころ葉の花の霞めるをちの天の香具山」「百のつかさあともひまして国見せず青香具山の春のあけほの」など、万葉大和を詠んだ作がいくつもある。

大正十一年の「常盤木」、昭和三年の「豊旗雲」と大和を詠んだ作はいよいよ多くなつてくるのは、当然のことであろう。

明治四十一年といえ、会津八一の「南京新唱」も、明治四十一年八月の作からはじまるとのことである。どれが初期のものか区別はないが「南京新唱」に左のごときものがある

はたなかのかれたるしばにたつひとのうごくともなしものもふらしも

はたなかにまひてりたらずひとむらのかれたるくさにたちなげくかな

「平城宮地の大極芝にて」とある。これまた、万葉卷六の「道の芝草長く生ひにけり」と比較して、そのちがいを見ることができようと思われる。

大正十一年（一九二二）の十月、島木赤彦は、黒谷の一寺院に宿泊して、毎日、京都大学図書館に通つて、「万葉集」の古写本を写した。その業を終えてあと、中村憲吉とともに、大和に行つた作品が「太虚集」に見える。

明日香路を歩きか行く心親しいにしへ人をあひ見る如し
あら玉の年の緒ながく思ひつる明日香の里に旅寝すわれは

山川を俯し見仰ぎ見いにしへの人にぞ恋ふるわがこびごころ

和辻哲郎の「古寺巡礼」の書かれたのは、大正八年のことである。出版は、大正十一年で、有島武郎などは、この書を手にしつつ大和を廻られたことである。和辻哲郎は、大正六年頃から、飛鳥奈良時代のことに関心されたこと「日本古代文化」のはじめにも書かれていた。

竹柏園の雑誌「心の花」がはじめて万葉号を出したのが大正四年で、それに豊田八十代の万葉大和地図が出た。万葉大和旅行のはじめたのも大正十四年頃からである。

C、D、ルウイスの「イタリア訪問」の詩集の扉に、J・ヤスパールの「イタリアの国土」から、次のようなことを引いてしている。

「イタリアを訪ねることは、発見の旅である。それは、単に風景や都市の発見ではなくして、むしろ、その旅人の心情と精神の潜在的特性の発見である……。」

大和が今や、こうして、潜在的可能性の発見となることを期待する。

付記、

天才的画家の青木繁が「天平時代」の油絵を描いたのは、明治三十七年のことであり、「光明皇后」は、明治三十九年の作である。なお、薄田泣菫あたりの新体詩における古語の復活もこの頃であつたことを思いおこしたい。

「ああ大和にしあらましかば」（「白羊宮」）は、明治三十九年五月の刊行であつた。